

雨の中に昨日が見える、明日が見える

菊地 知子

雨の日に、見えぬものへの想いを深くするのは、一人大人に限るものではないだろう。空から連続して降りる透明なカーテンによつて、外の世界から隔絶された場所に身を置いているかのような身体感覚は、見知った世界をも物理的な距離以上に遠く感じさせ、それゆえ子どもはしみじみと、

「○○ちゃんは どうしているかなあ」

などと独り言ちてみたりするのだろう。それと同時に

に、晴れた日に身躯を伸びやかに広げて遊んだ記憶を、再び引き出し、形を違え、意味を変えて深めていく様子も、雨の日の遊びに多く見られるように思う。

八年ほど前の記憶である。我が家のY子は二歳になると、三歳上の兄Kを幼稚園へ送る朝に目を輝かせて言うのだった。

「Y、こーんなに大きくなつたから、先生今日は、『どうぞ』って言うね」。

ずいぶん大きくなったのだから、もういい加減、Yちゃんも幼稚園に来てもいいですよ、と、先生が言ってくれるだろうとYは信じて待っている。入園までは早くともあと一年、一歳からようやく二歳になったのよりもたくさん時間がかかるのだ、というのを歯切れの悪い言葉で説明するも、あしたもあさつても一か月先も「あした」であるYに対しては、どうやらあまり説得力がないようだ。私は不必要に同情することはやめて、行かせられないのなら来てもらえばいいじゃないかと、家庭保育をコーディネートする機関に会員登録をし、有償ボランティアという名目で、子どもの預かりを始めた。今でいうファミリーサポートの走りである。先駆的な自治体がちらほらと、そこに教えを乞うて、自前のファミリーサポート事業に取り組み始めた頃である。下校後・降園後には、小学生の娘の友人、幼稚園児の息子の友人、そしてしばしばその親たちまで巻き込んで、ただでさえ子どもの出入りの多い我が

家は、さながら小さな児童館併設保育園といった風を呈し始めた。

H子とE子は、ある時期週に三、四回我が家に来ていた年子の姉妹である。娘のY子とはH子が五か月、E子が十か月程の月齢差であった。三歳になりたてのH子、二歳後半のY子、もうすぐ二歳のE子の三人を団子状に連ねて、やれ公園だ、Kのお迎えだ、と出かけたわが身を思い出すたびに、よくやっていたものだと感心もしあきれもする。雨ともなれば、Kのお迎えに出るためだけでも、E子を紐でおぶった上からレインコートを着、H子とY子にレインコートを着せて長靴をはかせ、二人に手をつながせてどちらか一人と私とが手をつなぎ、もう一方の手で傘を持って家を出た。われながらなかなかの勇姿である。H子とE子には、当時四歳の兄もおり、その母親が少し以前を振り返って「零、一、二歳の三人を連れて歩くのは、『移動』というよりは『運搬』という感じだった」と言っていたが、さもあり

なんと得心がいった。

ある朝、Y子と私はいつものようにH子とE子とを待っていた。その日はずっと雨降り、Kを見送り、H子とE子が来るときの常で、いそいそと家に戻ってきたY子は、予定の九時半になってもなかなか現れない二人を、

「Hちゃんたち、もうくるかなー」「あめこんこんでこないかなー」

と、遠いものを思う表情になって待っている。十時過ぎにドンドンと玄関の扉を叩く音がするのでY子と二人玄関に出てドアを開けると、大きな黄色いレインコートを着、開いたままの濡れた傘を持ってH子が立っている。右と左とでレインコートの裾の長さが違うのは、上から一つ目の穴と二つ目のボタンとを組み合わせた結果らしい。小さな人が、レインコートに小さな傘、長靴といった装束に身を包んで雨に立ち向かうべく佇むさまには、その潔さ故だろうか、目にするたび心打たれてしまう。

程なく、父親に抱かれたE子も現れ、

子どもたち三人は、地面を踏み鳴らすように両足でドスドス跳びはねて、今日も一日遊べる喜びをしかと確認し合う。H子は、長靴も脱がぬうちに玄関先で、話しておきたいことがある、と

でも言いたげなまっすぐなまなざしを私に向け、

「ひーちゃん、あめだから、自分でかささして、ゆきー、おかあさーん、ってきたの」

と言う（H子は母親をママと呼び、我が家に来ると私のことを、娘のY子が呼ぶように「おかあさん」と呼んでいた）。この場所に至るまでの彼女の姿を思うと愛しくて、

「そう。ひーちゃん、あめだから自分でかささして、ゆきー、おかあさーん、ってきたくれたのね」とH子のことばを繰り返す。H子は大きく頷いて、ブンブンと足で振り払うように長靴を脱ぎ、部屋の中に入ると、いつもの元気で遊び始めた。H子は



かばんに、お気に入りのハムスターのぬいぐるみを入れてきていた。ハムスターはさっそく、我が家のウサギやクマとささやき声で会話を始める。Y子もE子も「何やつてるの？」などと無粋なことは問うこともせず、ままごとの器に積み木を入れた「食事」を甲斐甲斐しく運んだり、ハムスターたちの寝場所を整えたり、他の人形も連れてきて会話に加わったりする。六畳の狭い部屋の中では、たちどころに、生き生きと、また安定感のある確かなごっこ遊びが展開するのだった。

ややあつてふと見ると、H子が、六畳間に続く台所のテーブルの下にうずくまっている。首を少しだけ起こしてかすかにフルフルと振ってみたりする中で、私には思い当たることがあり、自分も床に座つて、

「あら？ そんなところに居るのは、井の頭公園のモルモットさんかなあ」

と言つてみた。H子はこちらを見て声を出さずに二

度頷く。

「それじゃ、おひざに抱っこしよう」

と言つて私は、H子の丸めたお尻と胸のあたりを包み込むように持ち上げてひざに乗せ、

「かわいい、かわいい」

と背中をなでた。今、自らが小さなモルモットになつて私のひざの上で丸まっているH子は、十日ほど前の晴れた日に訪れた、大きな公園へと思いを馳せているようだった。その公園の小動物コーナーで、順番を待つ列に何度も走つて行つて並んでは、愛しそうにモルモットをそのひざに抱いていた。

モルモットのH子は、ひざの上で私を見上げて床を指差し、元の居場所に戻せと示す。テーブル下の隅にH子を置くと、モルモットはすぐさま三匹に増えた。抱き手は列に並ぶまでも無く、大忙しで順番に膝に抱いては、

「かわいいかわいい」

と背中をなでた。けれどもじきに三匹は、まさに

じゃれ合うように自分たちで遊び始め、私はこれ幸
いとはかりに床から立ち上がって、昼ごはんの支度
に取り掛かった。

私が食事やおやつ準備を始めるときの常で、H
子はいち早くその気配に気づき、

「ひーちゃんも！」

と言って戸棚の引き出し（無論、我が家の、であ
る）から子ども用のエプロン（無論、我が家の、で
ある）を出して首にかけた。肌寒の雨の日だから
と、温かいうどんを作る。まな板ににんじんをしつ
かりと固定し、ピーラーで皮を引く作業は、三人が
三人とも、是が非でもやりたいことである。あれや
これやと揉めつつも、つつがなくになんじんの皮はむ
かれ、他の食材と共に鍋で煮込まれて、その間、お
気入りの手遊びの二回も歌って待てば、あったか
うどんのできあがりである。もちろんこんなとき
は、出てくる歌詞の「そば」は「うどん」に変えて
歌う。

E子 子ども用の椅子に座らせてできたうどんを
腕につき、四つテーブルに並べると、E子が左右に
からだを揺らして「らいらいらてー」と言う。E子
流の「らいっしやいませー」である。

このことを初めてE子の口から聞いたのは、公
園で遊んでいたときだった。砂場で使うままと道
具を、袋からザッと一気に出したが、E子の意志
とは無関係にH子やY子によってひとつまたひとつ
と持ち去られ、目の前からなくなりかけていたと
き、E子は左右からだを揺らしながら「らいらい
らせー」と言って「売り子」に転じ、積極的に持ち
去られることを喜ぶ遊びに変えたのだった。この一
歳の子の知恵に、そのとき私は心底感心し、E子に
弟子入りするように、「らいっしやいませー」と、
一緒にままと道具を売りさばいたのだった。

「うどん屋さん、おうどんください」

と私は、今回はお客になってお金を払う真似をし
て、うどんの腕をひとつ、自分の前に置いた。果た

せるかな日子もY子も、E子にお金を払う真似をして、それぞれうどんを自分の方に寄せた。本当にいつもの日常使いの、何の変哲も無い茶色いテーブルでうどんをすすりながら、気分は充分「おでかけ先でのお食事」だった。

帰り際、迎えにきた父親を見上げて日子が、「ひーちゃん、今度また公園行くの」と言った。私はそれを嬉しい気持ちで聞いた。保育中、「今度また公園に行つてモルモット抱っこしようね」などと子どもたちと言ひ合つたりはしていない。けれども、否、だからこそ、気持ちを受け止め合えたことが嬉しく、「そうですとも。了解了解」と心中思ふ。保護者へ宛てた連絡ノートには、『テーブルの下にもぐつて、モルモットになって遊びました。お昼はEちゃんのうどん屋さんで食べました』と記しておいた。すべてをくまなく伝えることはできないが、日子の一言がまるで総括となつて、今日という一日についての理解を、大人たちに共通のものとしてくれ

るだろう。

この日テーブルの下で展開した、雨に音をかき消されたままのような静かな遊びも、幼い子どももの拙い物言ひから展開した遊びも、晴れた日の戸外での経験にしっかりと支えられていた。支えられていたのみならず、これから先の晴れの日を、別なタッチで必ずや彩つていく。

子どもと共に過ごす雨の日には、目前には居ない旧知に思いを馳せる子どもの心、今とは違う明日へと希望をもつて移つていく子どもの姿が、いつになりに形を伴つて私たちの前に立ち現れることがある。雨は、戸外での身動きを困難にさせ、室内での不自由を余儀なくさせる。しかし、雨の日もまた豊かに生きようとする子どもと、またその同行者によつて、慈雨となり、心の大地にゆつくりとしみ込み、大地を豊かな大地たらしめる水脈となつて、人もも成長させてくれるのだろう。